

# 歴史と文学のはざままで —— 戦後台湾人作家・李喬による太平洋戦争の記憶

明田川 聡士

海軍施設部一三一五部隊に召集されて、一九四四年二月にフィリピン最南端にあるサンガサンガという小さな島に送られました。ここに飛行場を建設しようとしたのですが、戦況が悪くなってミンダナオ島へ移りました。——林秋潭<sup>1)</sup>

## はじめに

日中戦争の開戦以来、日本の敗戦によりアジア・太平洋戦争（以下、太平洋戦争<sup>2)</sup>）が終結するまでの八年余りのあいだに、国内外では多数の犠牲者を出した。吉田裕『アジア・太平洋戦争』（二〇〇七）によれば、アジア諸国・地域での死者数は中国で一千万人以上と最多であったのはじめ、アジア全域では累計で一九〇〇万人以上へのぼったという。無論これらの死者数は、正確な統計資料が残されていないために推定される人数でしかないが、実際の犠牲者数はそれを上回る規模であった可能性が否定できない。いずれにしても日本の侵略戦争下においては、過去には見られない多数の人間が犠牲となったことは紛れもない事実であり、その太平洋戦争での最

大の犠牲者はアジアの民衆であった。<sup>(3)</sup>一方、吉田裕『日本軍兵士』(二〇一七)では日本側の犠牲者数についても言及している。旧厚生省の発表によれば、太平洋戦争での日本側の犠牲者数は日中戦争で死亡した者も含めて、その戦死者は約三一〇万人にのぼり、うち軍人・軍属が約二三〇万人、民間人(外地の一般邦人も含む)が約八十万であった。この軍人・軍属の犠牲者数のなかには、旧日本軍によって戦場に動員された台湾や朝鮮といった旧植民地出身者の約五万人も含まれる。<sup>(4)</sup>台湾でも太平洋戦争末期には陸軍や海軍で特別志願兵制度が施行され、さらには徴兵制も敷かれたが、終戦までに約二十万七千人が徴用され、そのうち約三万人の犠牲者を出していた。<sup>(5)</sup>「帝国臣民」として前線に駆り出されて命を落とした太平洋戦争とは、台湾人にとっても決して無視できない歴史的記憶であった。

こうした戦争経験を抱えるがゆえに、戦後の台湾文学界では太平洋戦争の記憶を物語化する創作が珍しくはなかった。そもそも前世紀には、太平洋戦争に限らず国共内戦や東西冷戦下で米国への軍事協力を行った朝鮮戦争・ベトナム戦争など、台湾社会は世紀を通して戦争と不可分の関係にあり、台湾の民衆は緊迫した状況下での暮らしを強いられた。それゆえに台湾文学界では「戦争」が主題の一つとして取り扱われてきた経緯がある。許俊雅「記憶与認同」(二〇〇六)によれば、一九六〇年代から九〇年代前半に至るまでのあいだには、台湾社会が経験した諸々の戦争を題材や背景として描き出す文学作品が多く生まれていったという。なかでも太平洋戦争下での描写が物語で綴られる時、作中で表現される恐怖や諦観、驚愕、憤懣などの感情は、いずれも台湾人の戦争記憶の一部として継承されていたのである。<sup>(6)</sup>

一方、丸川哲史「戦後台湾における戦争文学の形成」(二〇一一)によれば、本省人作家による戦争経験の語りという点に注目すると、戒厳令期には国民党による強権的な文化統制をかくぐり、それが表に出てくることは極めて例外的であったという。<sup>(7)</sup>丸川が例示する陳映真「郷村的教師」(一九六〇)、李雙澤「終戦の賠

償」(一九七八)、鄭清文「三脚馬」(一九七九)、李喬「孤灯」(一九七九)のほかにも、鍾肇政「中元的構図」(一九六六)、『江山万里』(一九六九)、陳千武「輸送船」(一九六七)、「遺像」(一九七六)、「獵女犯」(一九七六)などの作品もあったが、いずれにしても一九七〇年代までの台湾文学界においては、太平洋戦争を経験した本省人作家自身による戦争記憶の問題の描出は限られていた。戦後の国民党による軍事独裁体制下では、旧敵国である日本の侵略行為に戦争協力者として加担させられた自らの姿を、本省人作家が主体的に描き出していくことは容易ではなかったのである。

これらの作家のなかでも、台湾中西部に位置する苗栗の山村で生まれ育った客家人作家・李喬(一九三四)<sup>8)</sup>は、幼少の頃に太平洋戦争を経験し、後に台湾人の戦争記憶を描き出す小説をたびたび創作していた。日本の植民地統治下で生を享けた台湾人としては、李喬はいわゆる「日本語世代」<sup>9)</sup>の最後尾にあたるが、彼自身は戦後になってから中国語で創作をはじめ、一九六〇年代より小説を発表した。前出『孤灯』は、代表作「寒夜三部作」(一九七九〜八一。以下、『寒夜』と略す。)の第三部にあたる長編小説であり、日本の敗戦が決定的となる終戦間際を時代背景に、フィリピンの戦場と作者自身の故郷をモデルにした「蕃仔林」と呼ばれる山村、という二つの舞台を交錯させて展開していく。丸川の論考でも指摘されるように、同作は南方戦線での台湾人の経験を台湾客家人の一族の歴史のなかに位置付けた長編小説であり、世界史的な歴史の展開と客家人の家族史を織り交ぜる作風は、台湾文学界に新たな局面をもたらした。<sup>10)</sup>

ただし、このように南洋の戦場で台湾人が生き抜く姿を描き出す『孤灯』であったが、李喬は一九七〇年代末に同作を突如として創作したわけではなかった。すでに一九六〇年代に発表していた短編小説「山女」(一九六九)をはじめ、「蕃仔林的故事」(一九六九)や「哭声」(一九六九)などの諸作品でも太平洋戦争に関する多くの表象が読み取れる。

それでは、なにゆえに李喬は自身の文芸創作において太平洋戦争に関わる戦争記憶の問題を描き出そうとしたのか。李喬自身は直接的には戦時中に従軍経験があつたわけではないが、南洋の戦地を舞台とする創作は如何なる信条に基づいたものだったのか。

本稿では、一九六〇年代末から七〇年代末にかけての李喬作品において、台湾人の集団的記憶である太平洋戦争の歴史がどのように文学作品として物語化されているのかを確認し、考察する。そして、太平洋戦争の記憶を描く当時の李喬作品を読み解くことを通して、戦後の台湾人作家のあいだでの戦争記憶をめぐる表現の一端を明らかにしていきたい。

## 第一節 李喬と太平洋戦争

台湾の客家人作家・李喬は一九三〇年代半ばから四〇年代にかけて、生まれ故郷の苗栗で幼年期を過ごした。太平洋戦争が始まった年、李喬は新竹州大湖郡の大湖東国民学校（現、大湖国民小学）<sup>(1)</sup>に入学し、終戦まで四年間の日本語教育を受けていた。<sup>(2)</sup>これは植民地統治下の台湾で生まれ日本語教育を受けた世代の下限にあたるが、この年代の多くの当事者とは異なり、後に李喬が日本統治期の学校教育について回顧し、言及することはほとんどなかった。<sup>(3)</sup>一方、李喬の小説では作者自身の幼年期の様子が描かれるなかで、戦争の影も残している。たとえば、李喬が台湾の文学界に登場した直後に発表した短編小説「阿妹伯」<sup>(4)</sup>（一九六二）<sup>(5)</sup>でも、太平洋戦争の記憶が見て取れる。同作では抗日運動に参加して警察に連行された父親、主人公の「わたし」にとって唯一の遊び相手である中国大陸出身の男、日本名に改姓名した甲長から嫌がらせを受ける母親などを中心に、幼い「わたし」が植民地統治下の台湾で過ごした日常を映し出していくが、その描写の背後には時代に波打つように迫り寄る太平

洋戦争を伏線として敷いていた。

もつとも、李喬は幼い頃に太平洋戦争を経験したとはいえ、詩人の陳千武（一九二二〜二〇二二）のように、戦地での戦争経験があったわけではない<sup>(14)</sup>。また、戦争末期に盛んになった台湾島内における生産現場での勤労動員の経験もなかった。戦時下の台湾では一九四四年十二月に「陸軍召集規則改正」が施行され、十七歳以上で在学中の学生も召集が可能となった<sup>(15)</sup>。翌年一月には台湾総督府は台湾に本籍を置くすべての者を対象として、全島で徴兵検査を行い徴兵制を開始したうえ、兵力不足から基準年齢に達しない中等学校以上の学生に対する動員制度も構築していったが、幼い李喬自身はその対象者にさえも該当していなかった。その時期に李喬は空襲の影響で授業が正常に行われない教室と防空壕の間を行き来しながら、実在した蕃仔林の集落で戦火のなか貧困に喘ぐ婦女たちの姿を強く目の当たりにしていたのである<sup>(16)</sup>。こうした戦時下の蕃仔林での経験は、後の李喬の創作において主要なモチーフになっている。本稿で論じるように、ここでは自身の故郷をモデルにした虚構の空間である「蕃仔林」を舞台にして、男たちが徴発された後に取り残された婦女や障害者、少年の姿に焦点が当てられていくのであった。

このように李喬自身には戦地での直接の戦争経験はなく、戦時下の蕃仔林に取り残された人々の姿を通して太平洋戦争の進展を認知していったと推察されるが、一方では年の離れた次兄が直接戦争に動員されていたという事実も看過できなかった。李喬は《寒夜》を発表した直後に作家の宋澤萊からインタビューを受けていたが、その際に次のように応じていた。

わたしには兄弟が二人いまして、二番目の兄は日本へ行き、「海軍工員」を務めました。飛行機を作る工程で、戦争が終わる一ヶ月前に、兄は神風特攻隊員に割りふられ、出発の命令を待っていたところ、そのまま

戦争が終わったのです。<sup>(18)</sup>（傍線は筆者によるもの）

李喬はインタビューのなかで、次兄が海軍工員として台湾から内地へ渡ったことに言及している。また、このインタビュー以外に《寒夜》をめぐる別の座談会においても、李喬は次兄に関して次のように発言していた。

志願させられたのは兵士だけではありません。私の次兄は小学校を卒業したとき十六歳だったのですが、成績が一番と二番だったものはみんな志願しなければなりません。軍人でなくて海軍工員でも陸軍工員でも志願させられたのです。最後に、私の兄は神奈川に連れていかれ、「人間爆弾」の訓練を受けました。兄は八月二十二日に乗り込む予定でした。そして死なないうすみました。<sup>(19)</sup>（傍線は筆者によるもの）

太平洋戦争末期、内地では青年男性が戦場に動員され、深刻な労働力不足に陥った。海軍は安定した労働力を確保するために、皇民化運動が進む台湾からも若者を内地の軍需工場に向けて動員することを検討し、当初計画では、一九四三年からの五年間で二万五千人から三万人を動員する予定であった<sup>(20)</sup>。実際には同年五月以降、終戦までのあいだに十二歳から十八歳まで八九一四人の少年を八回に分けて台湾より送り込ませ、海軍最大規模の工廠であった神奈川県高座郡の高座海軍工廠を中心に、兵庫県西宮市や姫路市の川西航空機、名古屋市の三菱重工業、群馬県館林市の中島飛行機など全国の航空機製造工場で徴用工員として働かせたのであった。<sup>(21)</sup> 彼らは「少年工」と呼ばれ、特に雷電や紫電など主要戦闘機を地下壕の工場で組み立てていた高座海軍工廠では、軍事動員されていた約一人のうち台湾からの少年が八割以上を占めていた。<sup>(22)</sup> 当時のグラフ誌である朝日新聞社編『大東亜戦争と台湾青年』（一九四四）でも、「その殆どが、国民学校卒業の少年期を過ぎたばかりの青年は、（中

略)未だ俗世の風を受けぬ紅顔の青年である」と紹介されていたように、こうした少年工の大半は国民学校卒業程度の学歴であり、五年間の技術研修という名での工場勤務を終えれば上級学校の卒業資格が与えられるという約束で渡航していた。<sup>(26)</sup>

このように工場で戦闘機部品の組立工、仕上工、溶接工などとして作業を担っていた少年工は陸軍少年飛行兵などとは異なり、<sup>(27)</sup>次兄が「神風特攻隊員に割りふられ、出発の命令を待っていた」り、あるいは「人間爆弾」の訓練を受け」ていた事実は実際にはないのである。インタビューや座談会における言及は、李喬自身による誇張的な表現、あるいは記憶違いであったかのようにも思われるが、少年工の次兄が具体的に内地でどのような状況に身を置き、李喬がその事実を如何にして知り得ていたのかについては定かでない。次兄の戦争経験をめぐっては、李喬自身も分からず、他者からの伝聞に頼らざるを得なかったのかもしれない。あるいは長年にわたり小説創作を重ねるなかで、李喬自身の戦争記憶そのものが変化していったのかもしれない。ただ、いずれにしても李喬が描き出す小説に底流するのが、幼年期の太平洋戦争をめぐる記憶であったことは間違いなく、その描出は自身による当時の見聞に基づくものばかりではなかったことも感じさせるのであった。

## 第二節 銃後の飢餓

さて、一九六〇年代末以降の李喬作品についてであるが、当時の諸作品を考察する際に、短編小説集『山女』(一九七〇)を無視することはできない。『山女』は作者にとって第五作目の作品集であり、創立してまもない台北の晩蟬出版社より「晩蟬叢書」の一作として刊行された。同書に収録された諸作品は、一九六二年から六九年までの八年間に発表した十二編である。それらはいずれも作者自身の故郷である蕃仔林をモデルにして創作され

た物語であり、主要人物は複数の作品にまたがり登場する。同書の書名として標題が掲げられてもいる短編小説「山女」<sup>(28)</sup>は、一九六九年三月に『青溪月刊』で発表され、初期李喬作品の代表作として知られている。物語では鹹菜婆と呼ばれる老婆が、「蕃仔林」の集落で最も辺鄙な場所に住まう阿春という女を訪ねるところから始まるが、鹹菜婆が遠くまで足を運んだのは、阿春の夫である阿槐に貸した配給米を返してもらおうよう催促するためであった。阿槐は台湾島内での飛行場修復のために徴発されていたが、妻子が餓死することを心配して自宅に戻っていた。その阿槐に「俺が戻って、もしもあいつらがすでに死んでいたら、米は、絶対にあんたに返すから」と懇願された鹹菜婆は、配給米を不承不承渡したのである。だが、白痴の阿春は夫が南洋へ動員されてしまうとサツマイモをかじることでしか空腹を満たすことができない。阿春の娘である春枝にも発達障害があり、ズボン履かず外を走り回るなかで、鹹菜婆は配給米を取り立てるのを諦めて戻って行く。

「山女」では物語が戦時中に設定されていることが明白だが、李喬は同作からおよそ半年後の同年八月にも、同時期を時代背景にした短編小説「蕃仔林的故事」<sup>(29)</sup>を発表している。「蕃仔林的故事」はその標題が小説集『山女』のサブタイトル「蕃仔林故事集」と重なることから、「山女」と同様に同書のなかでも中核的作品であることが窺える。同作は阿泉と呼ばれる国民学校に通う少年を主人公に、一人称の視点で綴られていく。戦時中、米軍による空襲のために登校の必要がなくなった僕は、遊び仲間の少年たちと一緒に、福興嫂という中年の未亡人と発達障害を抱える安仔という青年の二人をめぐる噂話を始める。福興嫂と安仔は、食糧難から病死して遺棄された豚まで掘り起こして食べてしまうことを密談するが、突然そこに鹹菜婆が飼っていた野良犬が現れ、安仔とのあいだで豚の取り合いを始める。犬も人間同様に飢餓に喘ぎ、「どの骨もはつきり見え、特にその頭は、義民廟の無縁仏をまつる納骨堂のなかにある人間の頭蓋骨のようであった」。

このように両作に通じるのは、戦時中の飢餓をめぐる描写である。『山女』に収録された作品では、これら以

外にも同じ年に発表された「呵呵、好嘛！」<sup>(30)</sup>や「我沒搖頭」<sup>(31)</sup>などの物語でも、戦争を背景に庶民の飢餓が表現される。林瑞明が「台湾の作家で貧困と飢餓を描写するのに李喬よりも痛々しく描き出す者はいない」<sup>(32)</sup>と評したように、李喬の小説で描き出される「蕃仔林」の人々の姿は、常に空腹感に苛まされ見るも無惨なほど痛々しい。

『山女』における諸作品に関しては、李喬とは旧知の仲であった鄭清文も「蕃仔林は作者が生まれ育った場所であり、蕃仔林の物語は作者が成長した記録である」<sup>(33)</sup>と述べていたが、こうした自伝的作風に関しては李喬自身も否定しなかった。<sup>(34)</sup>それは李喬の創作が作者自身の過去を追想する形から生まれた物語であることを示しているのであり、作中で展開される物語内容は、かつて戦時中の蕃仔林で直接見聞した出来事に基づくものであった可能性が高かった。

ただし、一方で李喬の創作はそうした作者個人の内面に向けてのものだけではなかったことも確かである。彭瑞金は次のように指摘していた。

ご多分にもれず李喬の創作も自らの境遇から出発し、自身の血が滴るころの傷口を露わにしていた。しかし自身の不幸な人生の経験をとおして、李喬は悲惨な大地の縮図を降り注いでもいた。それにより「蕃仔林」という苦難に満ちた大地の小さな欠片は、李喬自身の幼い頃の悲痛さに対する追憶と人々の災禍への哀れみの結合になるのであった。<sup>(35)</sup>（傍線は筆者によるもの）

彭瑞金の指摘によれば、『山女』に収録された諸々の作品は「自身の幼い頃の悲痛さに対する追憶」であると同時に、「人々の災禍への哀れみ」を結合させるものであるという。つまり、李喬が同書で描き出した物語世界とは、過去の個人的な事情の追想にとどまるものではなく、ひろく台湾社会全体に向けての視線も確認できるこ

とを示していた。

それでは『山女』の諸作品では、こうした「人々の災禍への哀れみ」はどのような形で示されているのだろうか。この点に関しては、花村の指摘が参考になる。

わたしが言及するこれら二編（「山女」および「蕃仔林的故事」、筆者注）は、表現の面で技術的に超越し、疵痕を残していないほか、最も肝心なのは少しも誇張せずに日本統治下での、台湾同胞の最も基層にあり最も基本的な生活への希求がどれも失われていく様子を描き出していた。それは二編とも「飢餓」、人為的につくられた飢餓を描くのだった！（傍線は筆者によるもの）

先に引用した林瑞明の指摘と同様、花村もこれらの作品における「飢餓」の意味合いに注目する。ただし、花村はそれが「人為的につくられた飢餓」であると、特に説明を加えていた。

花村の指摘は、物語中で戦時下での緊迫した食糧事情の一端が描かれていくことを指すのであろう。たとえば「山女」では、主人公の老婆が「蕃仔林」の外れに位置する阿春の家に向くのは、貸し与えた配給米を取り返すためであったが、李喬は作中で鹹菜婆の姿を次のように描いていく。

ばあさんは背丈がとても低く、蜜柑の木は高かった。長いあいだ探してようやくそこそのものを一つ二つ見つけたが、どうしても手が届かなかった。何度も繰り返したが、蜜柑を食べることはできず、汗がたくさん出てきた。汗が大量に流れ、お腹はうろたえてしまうほど空っぽで、しきりに捻るような痛みが走った。低く沈むようにお腹が鳴って、頭がぐらくらし目がチカチカするのを我慢していた。ばあさんは何歩かよろ

よろと歩いて地べたにへたり込んだ。

「いま白飯を一杯でも食べられればいいんじゃが……」

ばあさんはブツブツと一人で話した。このひと言がしつかりと思ひ起こさせた。今日は阿春のところにも米を取り返しに来たのだと——二碗の在来米だった。<sup>(37)</sup>

鹹菜婆が南洋へ徴発された阿槐の懇願に応じて、阿春ら母娘に貸したのは「二碗の在来米」であった。物語では米を必要としている阿春ら母娘だけではなく、鹹菜婆自身も空腹に苛まされて困窮している。鹹菜婆が切望するのも「白飯」を食べることであつたように、作中では米や白飯のやり取りが人々の飢餓の度合いを示す尺度にもなっていく。

同様に「蕃仔林的故事」でも、米の欠乏は飢餓を表す符号として作用している。同作では主人公の阿泉が自宅裏の岩石に腰掛けて、あてもなく想像を膨らます。少年が頭に思い描くのは、終戦により戦時下での配給制度が廃止され、思う存分に空腹を満たすことであつた。

たとえば、僕があの日「横坑」の洞穴のなかで拾った誰かが忘れた白米。ちょうどその日に来ると言っていた山のオヤジが病気になって来られなくなり、絞めた大きなオンドリは、全部自分で食べてしまった。ハハハッ！南洋へ行き海軍の兵隊になった一番上の兄ちゃんが、日本の内地で飛行機をつくっている二番目の兄ちゃんと一緒に帰ってきた！とても大きなブタ肉の包みを持って帰ってきた。僕は言った。兄ちゃん、毎月四台湾両のブタ肉が配給されるだけじゃなかったの？そうさ！でも俺はもつともつと多く買っていいんだ。二番目の兄ちゃんが言った。もしかして「改姓名」して日本人になったのか？ちがうって俺たちは

もう戦わないんだ！米とかブタ肉とか、全部配給の必要はないんだ。必要なだけあるんだ……。(38)

「僕」がまず思い浮かべるのは終戦後の兄の帰還であり、「洞穴のなかで拾った誰かが忘れた白米」でもある。物語では、その白米は安仔が野良犬と豚の取り合いを演じる伏線にもなっている。犬の飼い主であった鹹菜婆は、「あの年米の配給が始まった頃、夜に『横坑』の洞窟に米を隠した際に、迂闊にも滑って死んでしまっていた」。このように「山女」であれ「蕃仔林的故事」であれ、いずれの作品においても、物語では戦況が進むにつれて米の欠乏が目立ち始める。李喬は自身の創作において、戦時下での台湾人と飢餓の関係をしきりに描き込もうと試みていたのである。

実際、戦時下における台湾社会では厳格な食糧管理制度のもとで、台湾人は飢餓に苦しんだ。台湾総督官房情報課編『大東亜戦争と台湾』(一九四三)によれば、「銃後にあって軍民食糧の安全を確保する事は、戦勝を決定する上には、不可欠の要件である」(39)として、当時米は甘藷や小麦とともに食糧増産の対象作物として指定されていた。台湾や朝鮮など旧植民地を含む戦前の日本では、太平洋戦争勃発後から終戦までのあいだに食糧管理法として施行されたが、その運用は不足する戦時主要食糧の国家による調達と国民への配分という意味合いを持ち、戦時体制の色合いが濃厚であった。(40)とりわけ米に関しては植民地でも内地と結びつく徹底した食糧統制が敷かれていた。すでに太平洋戦争前には台湾でも人的・物的資源の統制を目的に国家総動員法が施行され、南方戦線に向けた最大の兵站基地として、食糧供給の必要性から米を中心とする穀物の厳格な管理統制が実施されていた。台湾総督府は「台湾米穀移出管理令」(一九三九)、「米穀配給統制規則」(一九三九)、「台湾米穀等応急措置令」(一九四一)などを次々と公布し、多方面で一段と厳格な食糧統制を実施していったのであった。(41)

ただし、この時に台湾で米は食糧増産に向けた最大の移出作物として見なされていたが、戦中の台湾農村では生産に必要な農業労働者や化学肥料の不足、および農地や水利の修復不良などによって産出量が大幅に減少していたのも事実であった。黄登忠・朝元照雄『台湾農業経済論』（二〇〇六）によれば、終戦時には米の作付け面積が約五十万ヘクタールにまで減少し、米の産出量は太平洋戦争勃発時の二分の一に当たる約六十三万トンにまで落ち込んでいたという。<sup>(42)</sup> 李喬と同世代であり台南で育った黄昭堂は当時を振り返り、戦時下で食糧管理が一元化されていく裏では、「穀倉であるはずの台湾で主食穀類の不足現象が戦局の緊迫感をあたえていた」と証言している。こうした当時の米穀をめぐる緊迫した食糧事情が、台湾に残された人々の暮らしに甚大な影響を及ぼしていたのは紛れもない事実であった。

初期の李喬作品は作者自身の生まれ故郷である蕃仔林の山村を舞台にした物語が多かったが、ここでは単に牧歌的な風景を描き出すわけではなかった。李喬は戦時下の蕃仔林で人々が飢餓に苦しむ様子を浮き彫りにしたが、それは台湾人の多くが経験した戦争記憶を物語中に埋め込むことでもあった。作中での物語展開は当時の戦局と呼応し、戦時下における台湾情勢を鮮明に浮かび上がらせていた。そうすることで、作品と台湾人読者のあいだで生まれる情緒的な共感を生み出していたように思われる。一方で、当時の農村地域では、労働力を補填するために女子青年団が組織化されるなど、戦後の農業開拓には大勢の婦女が駆り出されていたことも事実である。<sup>(43)</sup> しかし李喬の物語では、銃後を守るそうした強靱な女性像は現れない。台湾人女子青年団の活躍ぶりに関する記載を「わば正史として見るならば、むしろ作者が表現しようとして試みていたのは、正史的な歴史の記憶からはこぼれ落ちる、戦時中の食糧制度という国家的制約のもとで苦しむ人々の姿を浮かび上がらせることにあったのである。

### 第三節 出征青年と泣き声

このように戦時下における台湾での飢餓を題材にして銃後の様子を描き出すことは、当時の李喬作品のなかでも特徴的な創作手法であった。そこで描かれるのは婦女や少年、老人などが多かったが、一方で李喬は台湾から南方戦線へと向かう成人男性の姿にも視線を向けていた。

一九六九年九月に発表された短編小説「哭声」<sup>(45)</sup>では、阿福と阿青という二人の青年を中心にして物語が展開される。結婚した阿福には一ヶ月前に生まれたばかりの子供がいる。一方で、阿青は阿福より十歳あまり年下の若者である。阿福は軍夫、阿青は兵卒として、明後日の早朝に南洋へ向かうことが決定しており、二人は軍部の徴発を受ける前に故郷の深山にある「鵲婆嘴」と呼ばれる岩石が聳える場所へ登るのであった。そこは辺境の地である「蕃仔林」からもさらに奥地にあり、「むかしの人は何人も登って行った後、戻ってこなかった」と伝えられる。人々に畏怖される鵲婆嘴からは泣き声が何度も響きわたり、二人の若者はその泣き声の正体を探り出そうと冒険するのであった。

同作は後に、戦後台湾文学の代表的作家の創作を集めた作品集『大家文学選』（一九八一）にも収録されたが、そこでは物語の内容に関して次のように言及している。

泣き声とは伝説に過ぎず、いつたい存在したのかしなかったのか、あるいは結局のところ何だったのか、誰にもはつきりと分らない。ただし皆の心のなかには泣き声が響き、人々は泣き、山河や樹木も皆泣いている。大地は皆泣いていて、この不条理な世界は泣き声だけによって覆い被され、陰鬱でむごたらしい雰囲気<sup>(46)</sup>を醸し出している。（傍線は筆者によるもの）

この解説に署名はないが、執筆者は『大家文学選』で選者の一人を務めた洪醒夫であろう。<sup>(47)</sup> 同解説では「哭声」の物語全体で、泣き声に覆われる「不条理な世界」は「陰鬱でむごたらしい」様子である点に視線が向けられる。後に李喬は自身も参加した文芸誌『台湾文芸』での座談会において、主人公の若者たちはまもなく訪れる南洋への動員という「必然的な宿命を感じている」と指摘したように、物語の時代背景は台湾で徴兵制が施行されてから終戦を迎えるまでのあいだである。台湾総督府編『台湾統治概要』（一九四五）によれば、一九四五年一月に実施した全島一斉の徴兵検査では、検査対象者四万五七二六人のうち、甲種四六四七人、乙種一万八〇三三人のほとんどが現役兵として入営した。<sup>(48)</sup> また、前述のとおりそれに先立つ前年十二月には「陸軍召集規則改正」が施行され、徴兵年齢が引き下げられて満十七歳以上の学生であれば召集が可能となっていた。作中では、阿福より十数歳も年下で二十歳前の年齢と思われる阿青も同時に徴発を受けているのは、終戦間際の台湾での徴兵制度をめぐる状況を踏まえているかのようである。

そうした「必然的な宿命」は、作中では常に死を暗示させるものでもある。たとえば、阿福と阿青の二人は鶴婆嘴を目指す途中、伯公廟の前で阿妹伯や阿火仙ら「蕃仔林」の老人たちに出会う。老人たちは二人が同時に南洋へ徴発されることを怪訝に思いながら会話を交わすが、「笑い声が収まった時、誰もが不安な色を浮かべていた」。青年たち自身だけではなく彼らを見送る「蕃仔林」の人々もまた憂いを隠せず、若者が目指す先が「何人も登って行った後、戻ってこなかった」場所であることを知ると、「二人の年寄りはあると声を出し、立ち上がり、同時に彼らを制止しようとした」。

こうした同作に関して、鄭清文は青年二人が鶴婆嘴への冒険と自らの死を重ねていることに注目し、次のように論じていた。

彼ら（阿福や阿青、筆者注）は普通の探検家に見られる挑戦や克服という心理状態ではなく、遠くにある死（実はそれほど遠くにあるわけではないのだが）をただ賭けているだけなのだ。しかし依然として恐怖の心理状態から抜けきれない。このような恐怖の心理状態と戦争の影の交錯が、（物語、筆者注）全体を貫いているのである。（傍線は筆者によるもの）

作中では主人公の阿福と阿青にとって、応召することは死と直接結びつく恐怖を意味している。二人は「蕃仔林」に響きわたる泣き声を追いながら鶴婆嘴を指すあいだにも、戦争が終結し自らに対する徴発が取り消されることさえも期待する。そして二人が松林のなかの洞窟で白骨化した人骨を見つけ出す時、南洋での死が立体的な現実味を帯びながら彼らに迫り、鶴婆嘴から聞こえる泣き声とは自身の内心に響く声そのものであることに気がつくのであった。同作の標題にも見られ、作中では何度も出現する「哭声」（泣き声）とは、瀰漫する「戦争の影」とともに拡がる「恐怖の心理状態」を表す符号となっているのである。

このように李喬は、南方戦線へと送られる台湾人青年の姿を、死に対する恐怖心とともに描き出していくのだが、留意したいのは阿福と阿青の二人がそれぞれ軍夫と兵卒という異なる身分に設定されていることでもある。

本来、植民地下の台湾では、台湾人が兵役制の適用を受けることはなかった。植民地下での軍隊は支配者側によって構成されるものとして見なされ、帝国憲法によって定められていた兵役の義務も被支配者側である植民地の民には賦課されなかった。<sup>(31)</sup> そうした植民地支配の潮目が変わるのが、日中戦争の勃発であった。日中戦争の前年に元海軍大将の小林躋造が台湾総督に任命されて以降、台湾軍は総力戦に向けて動き出し、一九三七年四月には軍司令官が総督府に対して総動員に関する要望を提示した。<sup>(32)</sup> こうして総力戦のなかで皇民化運動が進展するにともない、台湾人にも戦時労働力として労働動員と軍事動員が課されていったのである。そして盧溝橋事件後の

九月には、台湾軍隷下の台湾守備隊から五五〇〇人の軍人が基隆より上海へ向かつて出発したが、その際には八五〇人の台湾人も軍夫として上海戦線に投入された。<sup>(53)</sup> こうした軍夫について、前述の総督府が刊行した『大東亜戦争と台湾』では、「軍人と共に第一線に活躍する準戦闘員」あるいは「銃なき戦士」という記述でもって讚えているが、<sup>(54)</sup> その実態は戦時下で軍需品の輸送運搬に使役するために雇い入れられた人夫であったという。<sup>(55)</sup> 中国戦線では漢民族として同胞の台湾人に銃を持たせることへの懐疑も払拭できず、行李運搬などの業務で使役されることが圧倒的に多かったのである。<sup>(56)</sup>

公的には「活躍する準戦闘員」として高らかに報知されていた台湾人軍夫は戦闘の第一線で雑役を担ったが、現実の戦地では階層的で絶対的な身分序列を重んじた旧日本軍のなかで、最下層であった軍属の範疇にも入らない最底辺に張り付く存在として位置付けられたままだった。<sup>(57)</sup> 軍人・軍属以外の者として規定されながらも軍隊を底辺から支えていた軍夫を動員するには、強制力をとまなう「徴発」と軍部との雇用関係からなる「徴用」という二種類が実際には併存したが、いずれにしても連隊所属の兵隊や派出所の警察官、役場の役人などの差配によって半ば強引に動員が行われていた。<sup>(58)</sup> 近藤正己は『総力戦と台湾』（一九九六）で、一九三九年末の時点で中国戦線に台湾人が軍夫として送られた人数は二万人以上にのぼったと試算しているが、台湾から動員された軍夫たちの多くは、その後日本の南進政策の拡大とともに、南洋の戦地に向けても送り込まれていった。そして台湾は太平洋戦争勃発後には、南進に向けて人的資源を動員する一大供給地へと化していったのである。この時に総督府は「台湾特設労務奉公団」「台湾特設動労団」「台湾特設農業団」「高砂義勇隊」などの名称で台湾人を東アジアや南太平洋の島々へ送り出したが、そうした彼らの身分は軍夫であり、弾薬や兵器の運搬、糧秣の揚陸、飛行場の整地、蔬菜の栽培、通訳、華人や華僑の動静調査、民情調査など様々な役割を担わされていた。<sup>(59)</sup> こうして日本の敗戦時に南方各地へ動員されていた台湾人の数は九万二七四八人にのぼったのである。<sup>(61)</sup>

このように戦時下で台湾人男性は、日本の対外侵略の先棒として南洋へ送り出されていった。本稿の冒頭でも言及したように、一九七三年四月の旧厚生省発表によれば、日中戦争から八年余りで計二十万七七八三人の台湾人が徴用され、そのうち三万三〇四人が戦死・戦病死した。戦死・戦病死者のうち、陸軍軍人（一五一五人）および海軍軍人（六三一人）の計二一四六人に対して、陸軍軍属・軍夫（二万六八五四人）、海軍軍属・軍夫（一万一三〇四人）の合計は二万八一五八人であり、死者数では徴用された彼らの方が軍人よりも圧倒的に多かったのである。<sup>(82)</sup> その死亡率は二十二・二パーセントに達し、徴兵制が開始されたのが終戦間際であったことを差し引いても、軍属の人数を含めるとはいえ台湾人軍夫の死者数の多さは突出していた。そして、こうした台湾人の戦争動員をめぐるのは、終戦後も様々な補償問題を未解決のまま残していた。戦死・戦病死した約三万人に関しては、戦後は日本人戦没者とは異なり十分な金銭的補償を受けられず、その遺族の生活も困窮した。台湾に生還した約十七万人も未支給給与や軍事郵便貯金・外地郵便貯金などの債務支払い、軍人恩給をめぐる問題などで日本政府からは差別的な取扱いを受けた。また、生還者の多くは戦後の国民党による軍事独裁下では対中侵略戦争協力者として売国奴（漢奸）のレッテルをはられるのを恐れ、戦傷の身をかばいながら当局の目を避けて暮らさざるを得なかったのでもある。<sup>(83)</sup>

ここで李喬の小説に戻ると、「哭声」の物語では阿福と阿青の二人が徴発されるのを前に、「今回の南洋行きは間違ひなく生きて帰れない」「おまえも俺も南洋に行くのは無駄死にだとわかりきっているのに、なぜ黙って行って行くのか？」と自問する展開が見られるが、このように作中では台湾から戦地に送られる軍夫という設定だけではなく、彼らの声を通して南洋での戦死やその後を訪れる不如意な半生を暗示しているのは決して偶然ではないだろう。李喬は軍夫という身分を前面に出すことで、当時日本の南進政策のために加担させられた若者たちの姿を描き出していたのだが、作中で響きわたる泣き声とは、もはや阿福や阿青ら特定の個人のものではなく、

戦時下を生き抜いた台湾人の叫びでもあった。

実際、李喬自身も泣き声と青年たちの南洋への戦争動員をめぐる関係については、強く意識していたようである。後年、李喬は評論集『台湾文化造形』（一九九二）のなかでも次のように述べていた。

（わたしの小説に、筆者注）「泣き声」で書き始めた作品がある。内容は第二次世界大戦末期、台湾島民の悲惨な境遇を描き出したものだ。青年たちは遠く南洋へ追いやられ、統治者のために命を捧げ、大部分が異国で死んだ。故郷に残した年寄りや幼子、障害者は、餓死の瀬戸際で苦しんだ。どの人も泣き出すほどの衝動にかられた。あるいは涙を枯らしていたと言ってもよく、声はしわがれ、泣き声は誰の心の底でも揺れ動くような響きがあった。それは人々の心のなかでゆらゆらと立ちのぼり漂いながら泣き叫ぶ声であった。ある日、山村のすべての人が忽然とその泣き声が大地に響きわたるのを聞いたのである。大地のすべてが泣き声に包まれたのだ……<sup>(64)</sup>（傍線は筆者によるもの）

ここでは「青年たちは遠く南洋へ追いやられ、統治者のために命を捧げ、大部分が異国で死んだ」と述べているように、とりわけ台湾から動員されて南洋で戦死した台湾人に視線が注がれている。「哭声」の物語空間の広がりや「蕃仔林」に限定されるが、それが示すところは、台湾の戦時下における様子へと物語の内容を大きく拡張させていたのでもある。市井の人物を主人公に取り上げ、彼らの特異な存在を時代の流れのなかに置き込むことで、物語は太平洋戦争という過去の歴史をはっきりと呼び戻している。そうすることで読者による往時の歴史に対する想像と共感を促しているとも言えた。

このように李喬は、台湾から南洋へ送り出されていく人々と、銃後の台湾で飢餓に苦しむ人々という二つの視

点から、太平洋戦争がもたらした「台湾島民の悲惨な境遇」を物語のなかで表現した。飢餓や泣き声で表現される登場人物の様相から、戦時下での台湾人の生き方を示そうとしていたのである。自身の故郷である蕃仔林を舞台にした「山女」をはじめ、「蕃仔林的故事」や「哭声」など太平洋戦争を背景とする物語を短編小説のかたちで集中的に書き始めたが、この時点で李喬の関心は、台湾島内での様相から南洋へ送られた台湾人をめぐる戦争記憶の問題へとその関心の幅を広げていたのである。

#### 第四節 戦争末期の台湾人青年とフィリピンの戦場

このように南洋と台湾を視野に、戦時下で生き延びる台湾人の姿に焦点を当てて描いていく作風は、『寒夜』の第三部である『孤灯』でも見られる。『孤灯』は一九七八年二月に執筆が始まり、翌年三月の脱稿までおよそ一年間にわたって創作されてきた。<sup>(6)</sup> ここではそれまでの諸作品で見られたような作者自身の実体験をもとにして執筆することよりも、文献調査や当事者への聞き取りの記録などを盛んに取り入れた創作が中心となっている。同作の主人公である劉明基と彭永輝は、いずれも「蕃仔林」で生まれ育った二十代半ばの青年である。「興亜勤労青年隊」や「労務青年団」という軍夫を想定させる身分で徴発された二人は、それぞれフィリピン・ルソン島とセブ島へ送られる。物語では二人が向かった場所は交錯するように展開されるが、フィリピンではいずれも「飢えた青年たちは痩せこけ、皮膚が黒ずんで骸骨のようだった」。『孤灯』の物語では一九四三年より太平洋戦争の終結までを描いていくが、米軍やフィリピン人ゲリラ兵の襲来におびえながらも故郷への生還を目指す台湾人青年にとって、戦争の終結は「終戦」を意味するものではなかった。物語の結末で語り手の声を通して「日本は本当に負けたのだ。戦争はもう終わった。そうだ、太平洋戦争は終わったのだ。大東亜戦争は終わったのだ。

それなのに、それなのに、自分の戦争はどうしてまだ終わらないのか」と台湾人の境遇を嘆いたように、南洋に送られた青年たちは終戦後も台湾への帰還を目指して密林のなかを彷徨い続けるのであった。

日本の敗戦時に東南アジアの戦地へ送られていた台湾人は、フィリピンでは一万二〇九〇人に達し、その数は東南アジア全域でオランダ領東インドの約一万八千人に次ぐ規模であった。<sup>(66)</sup> フィリピンはオランダ領東インドやマレー半島、東マレーシアなどからの天然資源を日本へ運ぶために戦略上重視され、旧日本軍はフィリピンの島々を堅守するために数多くの台湾人青年を送り込んでいた。<sup>(67)</sup> 『孤灯』の作中でも「フィリピンが陥落すれば、大日本の根底が揺らぐ」とあるように、同作での描出もそうした戦争末期の状況を踏まえている。このように台湾の「蕃仔林」と交互に、南洋のフィリピンさえも舞台にするという点は、台湾人の戦争記憶の問題を描き出すために必然的な設定であった。

そうした『孤灯』の物語は全十二章から成り立つが、第一章が「哭声」（泣き声）という標題で始まる点に留意したい。齊邦媛の同作に対する論評でも、標題との関連も含めながら物語内容に関して、次のような指摘が見られる。

この泣き声は故郷の土地と若者たちの決別の声なのだろうか？ 作中でそれは何度も出現するのだが、ときには村での出征軍人の戦死を嘆く声と混ざり合い、ときには灯妹による晩年の読経にとって代わり、民族の苦難と現世の残酷さを訴えている。この泣き声は作品全体を通したテーマとなっているのだ。<sup>(68)</sup>（傍線は筆者によるもの）

作中では南洋へ送られる若者たちに焦点が集まり、主人公である二人の青年は徴発される前夜に「鵝婆嘴」か

ら響きわたる泣き声を探そうと登っていく。その鶴婆嘴には「何人もの先人たちが登っていったが、二度と戻ってくることはなかった」という言い伝えが残るのであった。こうした物語展開は、前述した短編小説「哭声」の作品内容を敷衍したものであることが明白だ。芸誌『文学界』の特集「李喬『寒夜三部曲』討論会」における議論でも見られるように、『孤灯』の物語はそれまでに李喬が創作した「山女」や「哭声」などの諸作品を翻案して生み出されたものであるとも見なせた。<sup>(6)</sup>

ただし、同誌掲載の特集記事では李喬自身もそうした『孤灯』における作風の特徴については否定しなかったが、そこで表現される創作的な趣向はそれ以前の李喬作品における表現内容とは異なる。李喬は『寒夜』発表直後に応じた前述のインタビュでも、同作では「光復前後の、悲惨な人々の生活、遠く南洋へ送られ兵営で苦役につかされた物語<sup>(7)</sup>」を書いたと答えているように、物語の基軸は台湾から南洋へ送られて以降の若者たちの姿と心境を映し出すことであつた。同作のなかで、台湾人青年が「南洋へ送られ兵営で苦役につかされた」様子めぐつては、たとえば彭永輝を中心にして次のように描かれていく。

ここへやってきて半月あまりは、培ってきた精神力と体力で、能力を超えた重労働に何とか耐えてきた。故郷への思いと両親や妻子への気持ち、揺れ動く心の平衡を保たせていた。

だが、尽きることのない重労働が、毎日続いた。栄養の補給も日増しに悪化していった。そして何よりも気持ちそのものが萎えてしまい、どんどん衰えていった。精神的にも肉体的にも次々と異変が生じ、動きが悪くなっていった。(中略)自分から何かしようとする者も口を開こうとする者もいなくなった。何も考えず、何も見ず、機械のように動き、働くのだった。<sup>(8)</sup>

作中では、台湾人軍夫と思われる「労務青年団」の彭永輝が、牛馬同然に使役される様子が描き出されるが、こうした南洋の戦地で台湾人青年が強いられた姿については、従来の李喬作品では決して表現されることがなかったものである。

ところで、太平洋戦争中に台湾から南洋へ向けて戦争動員されたのは男性ばかりではなかった。戦時中に台湾軍司令部はしばしば女性のなかからタイピストを募集、選抜して南洋へ送り込んだが、その応募資格は内地出身者に限られていた。<sup>(72)</sup>一方、台湾人女性は従軍看護婦として南洋へ派遣されることが多かった。<sup>(73)</sup>柳本通彦「消えぬジャングルの記憶」(二〇〇四)によれば、一九四二年十一月には、台北や台南の陸軍病院から従軍看護婦として数十人がフィリピンへ向かい、マニラの南方第十二陸軍病院という収容患者数一万人規模、一千人以上の看護婦が働く、南方最大の陸軍病院で傷病者の看護を担っていた。<sup>(74)</sup>南洋の兵站病院として機能していた同病院は一九四四年十月以降には野戦病院と化し、米軍によってルソン島が包囲された後には、従軍看護婦は機銃掃射と空襲のなかでマニラから撤退し、北部山岳地帯へと逃げ込んだという。そして一九四五年三月以降には、台湾人女性を含む約六百人の陸軍看護婦や日赤救護看護婦が、飢餓やマラリア、敵軍の迫撃に苦しみながら八月下旬までルソン島の密林のなかを退散していたのであった。<sup>(75)</sup>

こうした台湾人青年に対する戦争動員の一面であった従軍看護婦をめぐるのは、『孤灯』の物語展開のなかにもその表象が現れている。作中では、劉明基の恋人「蘇阿華」にその姿を見出すことができる。物語では地主の一人娘で「婦女訓練団」の幹部も務める阿華は「永田華子」という日本名を持ち、それを「この上ない『名譽』」として感じている。やがて阿華は明基に対する徴発を阻止しようと、日本人将校の求めに応じて肌を許してしまうが、明基が南洋へ送られたことで、自分は騙されていたと気づくのであった。そして彼女は明基を追うように看護助手に志願してフィリピンへ渡り、ガソリン缶を抱きかかえたまま火薬庫に飛び込み爆死するのだった。

こうした阿華の描写について、邦訳《寒夜》の訳者である三木直大は訳書の解説のなかで、「阿華の苛烈すぎる性格とその行為は、人物設定としては矛盾があるとは思えないでもない」と述べている。<sup>(76)</sup>旧日本軍の火薬庫に飛び込み爆死するという展開は唐突感が強いが、三木が指摘するように、それは同作自体がエンターテインメントとしての性格を持つ読み物として完成していることも理由の一つである。ただし、阿華が看護助手として南洋へ渡るといふ設定そのものに着目すれば、李喬が意図する創作描写が歴史的展開をまったく無視したものではないことも感じられる。このように『孤灯』を創作する際に、李喬は台湾からフィリピンへと渡った男女の若者の動向を中心に描いていたが、それについては、《寒夜》の脱稿直後に発表したエッセイ「續紛二十年」（一九八一）でも言及していた。

描いたのは、台湾山村の非人間的な生活、そして十萬の青年が南洋へ赴いた事実である。前者では漢人の忍耐強い生命力を叙述し、後者は異国で無駄死にした台湾青年のための悲壮な鎮魂歌となった。「孤灯」は国民にとっては忘れがたく、忘れてはいけない苦痛の経験である。<sup>(77)</sup>（傍線は筆者によるもの）

太平洋戦争中に台湾の「青年が南洋へ赴いた事実」を「国民にとっては忘れがたく、忘れてはいけない苦痛の経験」として捉えている点からは、作者自身が創作のなかでそれを重視してきたことを読み取ることができる。作中では、彭永輝がセブ島で米軍による掃射を浴びて戦死し、故郷の「小さな山村で、近い親戚から遠い親戚まで、出迎える人たちが群れをなして」、青年たちの遺骨が白木の箱で南洋から帰還するのを出迎える。「蕃仔林」に届いた多数の白木の箱に象徴されるように、物語の展開では南洋の戦場で死んでいった無数の若者たちの姿が暗示されていくのである。こうした南洋で犠牲となった台湾人青年を直視しようとする真摯な視線は、後年に至

っても変わることはなかった。李喬は評論集『思想 想法 留言』（二〇一九）のなかでも、同作をめぐって次のように述べていた。

もっとも重要なのは台湾の青年が南洋をさすらったことであり、一九四二年から一九四五年のあいだに台湾から多くの青年が海外へ送られた。主にフィリピンやボルネオ一帯、特にバタン島では死亡者が非常に多く出た。植民された状況下で、植民者は我々の敵であり、台湾の青年は敵に代わり外国へ行き無関係の者と戦争をした。そこで死に、異国の他郷に骨を埋めたのだが、それこそが悲劇だったのだ。<sup>(28)</sup>（傍線は筆者によるもの）

李喬は太平洋戦争中に南洋へ向けて戦争動員された台湾人青年に対する強い関心を一貫して持ち続けた。この言及からも窺えるように、台湾の若者たちが南洋へ動員されたことをめぐる戦争記憶を自身の作中で描き続けていくことは、李喬の創作観のなかで「もっとも重要な」ことであったのだ。このように李喬は『孤灯』にて、台湾から南洋へ戦争動員された台湾人の青年男女の姿を物語中に描いていった。『孤灯』以前の戦争記憶を描き出す作品でもそうした歴史的展開の一端を表してはいたが、同作では台湾から南洋へと送り出されていた人々に対してさらに深い視線を向けていたのである。

## 第五節 反戦文学としての可能性

こうした『孤灯』の物語は、これまでに台湾意識や台湾人意識といったアイデンティティの確立という一面か



四郎の満州・シベリア、井上光晴のソロモン諸島など、旧日本軍が占領した国・地域に及ぶ。かつて戦前や戦中の文学作品が戦争を主題としながらも「勝利する日本軍」や「勇敢な日本兵」といった内容を描くことを強制されてきたのに対して、戦後派の文学では、自身の生命とそのあり方を見つめる人間、とりわけ一兵卒の姿を通じて、戦争の意味を問う作風が主流となった<sup>(83)</sup>。それは敗戦で迎えた戦争経験を一方的な被害者意識としてではなく、アジア諸国への侵略戦争における加害者の立場での自己批判へと意識を変えさせてくれるものであり、戦後の日本文学界はこうした文学作品が出現することによって、初めて加害者としての創作の視点と方法を獲得した<sup>(84)</sup>。そのなかでも、大岡昇平『野火』（一九五二）は、戦後派による文学的傾向を如実に現わすものである。物語は田村という名前の一等兵を主人公にして、作者自身のフィリピン・レイテ島での従軍経験に重ね合わせながら一人称で展開される。壊滅状態の旧日本軍守備隊のなかで、「私」は部隊から離脱して密林のなかを彷徨う。戦争批判の物語である同作は、人間的実存を追求する作品としても読み取られ、日本文学界での新たな一面を示した<sup>(85)</sup>。

こうした戦後派の文学作品は、半世紀に及ぶ植民地支配や旧日本軍による南洋への侵略戦争の記憶が依然として色濃く残る、一九五〇年代以降の台湾社会でも同時代的に紹介されていた。一九五九年には『野火』が台南の経緯書局より徐雲濤訳にて翻訳出版されている。また、同年には戦後派の作家には含まれないが、満州や中国東北部での自身の従軍経験を語った五味川純平『人間の条件』（一九五六〜五八）も、蔡謀渠などの翻訳により台湾版が刊行された<sup>(86)</sup>。

戦後の台湾は国共内戦や東西冷戦の影響を受けながら、国家総動員法や戒厳法、動員戡乱時期臨時條款などの施行によって実質的な戦時体制下にあった<sup>(87)</sup>。こうした戦後史のなかで、光復初期は旧敵国である日本の植民地色を一掃するために「脱日本化」と「祖国化」が並行的に推し進められ、新聞や雑誌、映画など文化面全般においても日本語使用が厳しく禁止されていた。しかし一九五〇年代に至ると、朝鮮戦争勃発後には反共主義の徹底の

方が「脱日本化」よりも優先度が高くなっていった。日本語書籍に關しても、たとえば一九五〇年四月には「台湾省日文书刊及日語電影片管制辦法」が制定され、許可制での条件付き輸入解禁がなされていった。<sup>(88)</sup>そしてこの時期には、日本語書籍の翻訳状況も同じような状況下にあった。高幸玉「日本小説在台湾的翻訳史——一九四九至二〇〇二」(二〇〇四)によれば、大岡昇平や五味川純平の小説も当時の「反共抗ソ」という政治的スローガンのもとで「反戦文学(ただし原文は、反戦小説)」として、台湾読者への教化という視点から翻訳刊行がなされていったといふ。<sup>(89)</sup>

こうした経緯から、台湾ではすでに一九五〇年代には大岡昇平『野火』や五味川純平『人間の条件』が代表的な同時代日本文学作品として好意的に迎えられるようになった。そして両作をめぐっては、李喬自身も日本語訳と原作の両方で読書していたようである。李喬が作家仲間の鍾肇政(一九二五-)に宛てた私信は、現在ではその多くが公開されているが、一九六六年八月十二日付けの書簡では大岡の名前について言及している。<sup>(90)</sup>また、同年九月四日付けの書簡でも「以前原文『野火』を読んでもあまりよく分かりませんでしたので、先日再度翻訳を読みました」としたためている。さらに、一九七五年一月十日付けの書簡では、「日本人による『人間の条件』序文の言葉ですが、わたしに大きな啓示を与えました」と記しており、こうした書簡での大岡や五味川についての言及からも、李喬が「戦後派」の文学作品における最大の特徴である反戦文学の創作に、強く関心を寄せていたことが十分に推察できるのであった。<sup>(91)</sup>

それにしても、李喬は何ゆえに大岡昇平の『野火』に対してこれほどまで関心を示したのだろうか。それを知ることがかりとなるのが、先に挙げた李喬と同世代である謝里法の指摘である。そこで謝は次のように論じ、戦後台湾人作家の戦争経験に対する認識の弱さについて批判的に論じていた。

台湾の作家たちは意識的にも無意識的にも過ぎたばかりの（太平洋戦争という、筆者注）問題を避けてきた。自らの身の上に残る疵痕をこころの奥底で押さえつけながら、（太平洋、筆者注）戦争については戦後三十年来の文学創作のなかで跡を残さないように隠していた。<sup>(95)</sup>（傍線は筆者によるもの）

確かに本稿の冒頭でも述べたとおり、戒厳令期の台湾文学界では、太平洋戦争を経験した本省人作家が自ら主体的にその戦争記憶について描き出していくという創作は政治的・社会的な制約から極めて限定的であった。戦後の作家が台湾人にとって足跡であるはずの南洋での戦争経験についてほとんど描かないという事実は、李喬の創作観にも強く響いていたはずである。実際、李喬は『孤灯』の創作を開始する直前である一九七八年一月三日付けの鍾肇政宛て書簡のなかでも、「台湾人にとって近代の歴史のなかで『南洋の戦争』は欠かすことのできないもの」<sup>(96)</sup>であると述べ、南洋での戦争という歴史を積極的に自身の作品で描いていくことに対する熱意を示していた。そうした太平洋戦争における台湾人自らにとっての戦争記憶を文学作品で描き出すという点は、李喬の創作表現においても本質的な主題であり続けた。李喬は二〇〇五年に台湾文学館で公開対談を行った際にも、『孤灯』を創作した時の心境について次のように語り、物語のなかで南洋を舞台にした戦争記憶を描き出す必要性について強く語っていた。

わたしたちの小さな村では、戦火のなかで兄弟が残ったのは死んだ者よりも少なく、多くが南洋で死んだのです。わたしの長期間にわたった調査による見積もりでは、出征したのは最も少なくて五万人、最も多くて八万人、死んだのは最少三万人、最多五万人です。これらの死傷者でも一番理不尽だったのは、台湾は日本により統治されましたが、日本は台湾にとって敵でありまして、台湾の青年は敵人に代わり外国へ行き自分

とはまったく関係のない敵の敵と戦って、異国で死んだのであり、遺体を引き取る者もないことです。政府でもよいし、民間でもよいのですけれども、その人たちに申し訳なく思うのでありまして、だから当時わたしは異郷の外地で寄る辺なき者のために死者の霊を呼び戻そうという気持ちで書いたのです。(傍線は筆者によるもの)

この時の対談での発言によれば、戦時下では故郷の蕃仔林の人々も「多くが南洋で死んだ」という。李喬は日本の侵略戦争のもとで「台湾の青年は敵人に代わり外国へ行き自分とはまったく関係のない敵の敵と戦って、異国で死んだ」という点を強く自覚し続けていた。そしてこうした死者たちへの哀悼から自らの小説を執筆したと述べるのであった。このような自身の創作観に対する熱情を表現するために、『孤灯』は常に故郷をモデルとする「蕃仔林」と結び付きながらも、南洋を中心的な舞台とする設定でもって、戦死した台湾人の青年男女を悼む反戦文学としての形で展開されていったのである。

## むすびに

本稿では李喬の「山女」「蕃仔林的故事」「哭声」という三篇の短編小説と代表作《寒夜》の第三部『孤灯』を取り上げ、李喬作品における太平洋戦争をめぐる戦争記憶の描写がいったい何を描き出してきたのかという点について考察してきた。いずれも一九六九年に発表された三篇の短編小説では、作者が自身の生まれ故郷で見聞した戦争の側面を、言わば実体験に基づき描き出していくのが特徴的であった。それは虚構の空間である「蕃仔林」という山村の様子を描くフィクションであったものの、そこで描出されるのは食糧制度下での飢餓や南洋へ

動員される軍夫の問題などであり、戦時下で多くの台湾人が直面した現実であった。小説の描写が虚構の空間である「蕃仔林」という場所に限定されるものの、それは当時の台湾社会の状況そのものを映していた。

ただし、李喬がフィリピンを物語の中心として『孤灯』を描き出すのは、そうした過去の歴史的事実を虚構のかたちで再現するためばかりではなかった。戦後の台湾では本省人作家自身による戦争記憶を描き出す作品が限定的であったという状況のなかで、李喬は同作を反戦文学のモデルとして創作しようと試みていた。そして、その裏では戦後の日本文学界における「戦後派」の作家、特に大岡昇平の代表作である『野火』から大きな啓発を受けていた事実も窺えた。「山女」「蕃仔林的故事」「哭声」から『孤灯』へと創作を続けるなかで、李喬は太平洋戦争という歴史を文学作品として虚構化していったが、それは日本の侵略戦争のために犠牲となった無数の台湾人青年たちを哀悼し、同時に戦後台湾人作家が政治的・社会的制約のもとで表現することが難しかった創作の隙間を埋めようとするものでもあったと言えた。

もつとも、『孤灯』における『野火』の影響について考えてみると、大岡の物語では無視できないほど重要でありながらも、李喬作品ではほとんど描き出されない点があることにも気づかされる。『野火』をはじめ、『俘虜記』（一九四八）や『レイテ戦記』（一九七二）など大岡による一連の作品では、兵士が戦場で命をつなぐために最後に残された手段として食人の問題が扱われるが、それについて李喬の小説ではほとんど触れられていない。戦争記憶を描き出そうと試みた李喬ではあったが、そうした人間の凶暴さからは意図的に目を逸らしたという可能性も考えられる。ただ、それよりも李喬が重視したのが、植民地統治下で戦場へと追いやられて犠牲となった台湾人の青年男女の姿を描き残すことであつたことは間違いない。

〔中国語要旨〕

太平洋戦争經常是戦後臺灣作家之作品中至關重要的背景或主題。李喬（一九三四～）自身の戦争記憶也始終縈繞於其文學作品中。筆者將從文學及戰爭記憶的觀點，重新檢視李喬初期作品集《山女》（一九七〇）的數篇短篇小說乃至於其代表作「寒夜三部曲」第三部《孤燈》（一九七九）中所展現的意義及光譜變化，並藉此重新思考李喬作品中歷史與文學之間存在的曖昧性，以及其曖昧性之影響。

注

- (1) 伊藤孝司『棄てられた皇軍——朝鮮・台湾の軍人・軍属たち』（影書房、一九九五年）三十一頁。同書によれば、林秋潭は一九一九年生まれ、フィリピンで終戦を迎えた後もジャングルにとどまり、一九五六年に台湾へ帰国した際には妻はすでに再婚していたという。
- (2) 「太平洋戦争」という呼称はその地域性を限定してしまうので、日本では一九八〇年代以降には学術的用語として「アジア・太平洋戦争」を使うことが定着している（石川巧、川口隆行編『戦争を「読む」ひつじ書房、二〇一三年、iii頁）。ただし、本稿では特に断りのない限り、太平洋戦争はアジア・太平洋戦争を指すものとする。
- (3) 吉田裕『アジア・太平洋戦争』（岩波書店、二〇〇七年）二二二頁。
- (4) 吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、二〇一七年）二十三～二十四頁。
- (5) 黄昭堂『台湾総督府』（教育社、一九八一年）二六五頁、および厚生省社会・援護局援護五十年史編集委員会『援護五十年史』（ぎょうせい、一九九七年）二三三頁。
- (6) 許俊雅「記憶与認同——台湾小説の二戦経験書写」『台湾文学研究学報』（第二期、二〇〇六年）六十～六十三頁。
- (7) 丸川哲史「戦後台湾における戦争文学の形成（一九五〇年代～七〇年代）」『社会文学』（第三十三号、二〇一一年）一五九頁。
- (8) 李喬（本名・李能棋）は日本の植民地統治下であった台湾・新竹州（現、苗栗県）の生まれ。客家人。新竹師範学校（現、国立清華大学）卒。実質的には初作品となった短編小説「酒徒的自述」（一九五九）を発表後、創作年数は六十年を超える。代表作「寒夜三部曲」（一九七九～八二）は清末から日本統治期終焉まで半世紀に及ぶ台湾近現代史の展開を描き出し、英語や

- 日本語などに翻訳された。一九八〇年代以降には政治的・社会的タブーを衝く小説を数多く発表したが、文芸創作のほかにも台湾社会の民主化運動に対して積極的に関与してきた。上下巻で七十万字を超える大著『埋冤一九四七埋冤』（一九九五）では、作者自身による長年の実地考証と聞き取りをもとに、それまで禁忌と見なされてきた二二八事件の実態を抉り出した。台湾ペンクラブ会長や民進党政権国策顧問などを歴任。国家文芸賞をはじめ、吳濁流文学賞や呉三連賞など数多くの受賞歴がある。なお、李喬の生涯と作品については、彭瑞金編『台湾現代作家研究資料彙編二十七——李喬』（台南市・国立台湾文学館、二〇一二年）に詳しい。
- (9) 台湾では、日本の植民地時代に日本語教育を受けた人々は「日本語世代」と呼ばれることが多いが、ほかにも日本の学界では「日本語族」や「日本語人」といった呼び方もなされる。こうした言葉の用法に関して、安田敏朗は次のように指摘している。「世代」としてしまうと、世代のなかでの差異をとらえそこなうことにはなるが、『日本語人』とすると、『世代』に焦点化できなくなるくらいもある。（中略）日本語を駆使している人々は、自称として『日本語族』を用いる場合もあるようである。（安田敏朗『かれらの日本語——台湾「残留」日本語論』人文書院、二〇一一年、十六〜十七頁）
- (10) 丸川哲史、前掲論文、一六〇頁。
- (11) 李喬『思想・想法・留言』（台中市・台湾李喬文学協会、二〇一九年）九十一頁。
- (12) 許素蘭『給大地写家書——李喬』（台北市・典藏芸術家庭、二〇〇八年）二十四頁。
- (13) 李喬『阿妹伯』『中央日報』（一九六二年十月十四、十五日）。
- (14) 陳千武は陸軍特別志願兵として、シンガポールやジャカルタ、スラバヤ、ティモールでの作戦に参加した（陳千武『年譜』、陳千武『丸川哲史訳』『台湾人元日本兵の手記——小説集「生きて帰る」』明石書店、二〇〇八年、一九九頁）。
- (15) 鄭政誠『戦時体制下台南師範学校学生の軍事訓練と動員』（一九三七—一九四五）『国史館館刊』（第四十一期、二〇一四年）一七一頁。
- (16) 小野純子『日本統治末期、台湾の防衛体制と『留守名簿』——第四十軍と嘉義を中心として』（名古屋市立大学博士論文、二〇一九年）七十三頁。
- (17) 許素蘭、前掲書、二十五頁。
- (18) 廖偉竣『走出「寒夜」的作家——李喬訪問記』『暖流』（第一卷第四期、一九八二年）五十頁。なお、廖偉竣は宋澤萊の本名である。
- (19) 李喬・周婉筠・三木直大『座談会「寒夜」の背景』『植民地文化研究』（第五号、二〇〇六年）一九四頁。

- (20) 「昭和十七年十二月 台湾青少年採用の件申継書」『大和市史六——資料編 近現代下』(大和市、一九九四年) 四八七頁、および大和市役所管理部庶務課編『高座海軍工廠関係資料集——台湾少年工関係を中心に』(大和市役所管理部庶務課、一九九五年) 六頁。
- (21) 台湾総督府編『台湾統治概要』(原書房、一九七三年) 七十五頁、および竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史——昭和篇(下)』(田畑書店、二〇〇一年) 二四三頁。
- (22) 大和市役所管理部庶務課編、前掲書、七頁。
- (23) 加藤邦彦「視同仁の果て——台湾人元軍属の境遇」(勁草書房、一九七九年) 一七〇頁。
- (24) 佐藤敏朗「内地の台湾青年」、朝日新聞社編『大東亜戦争と台湾青年』(朝日新聞社、一九四四年) 五十五頁。
- (25) 竹中信子、前掲書、二四四頁。
- (26) 樋口雄一・鈴木邦男「大和市と台湾の少年工——高座海軍工廠関係資料調査概報」『大和市史研究』(第十八号、一九九二年) 七十三頁。
- (27) 近藤正己「台湾の労働動員」、大濱徹也編『近代日本の歴史的位相』(刀水書房、一九九九年) 一八〇～一八一頁、および黄華昌「台湾・少年航空兵——大空と白色テロの青春記」(社会評論社、二〇〇五年) 七十六～九十七頁。
- (28) 李喬「山女」『青溪月刊』(第二十一期、一九六九年)。なお、本稿における作品の引用箇所は李喬『李喬短篇小説全集五』(苗栗市・苗栗県立文化中心、二〇〇〇年) を底本とし、拙訳によるものである。
- (29) 李喬「蕃仔林的故事」『中国時報』(一九六九年八月十五、十六日)。なお、本稿における作品の引用箇所は李喬、同上書を底本とし、拙訳によるものである。
- (30) 李喬「呵呵、好嘛!」『台湾新生報』(一九六九年六月一日)。
- (31) 李喬「我没搖頭」『純文学』(第六卷第一期、一九六九年)。
- (32) 林瑞明「愛恨分明的大地之子」、李喬『李喬集』(台北市・前衛、一九九三年) 十一頁。
- (33) 莊園「作家的起点」『台湾文芸』(第十四卷第五十七期、一九七八年) 八十二頁。なお、莊園は鄭清文の筆名である。
- (34) たとえば短編小説「山女」に関して言えば、後年に李喬は登場人物の阿春と春枝は「わたしが幼い頃からよく知っていた人物」(李喬『重逢』台北県・印刻、二〇〇五年、七十頁) であったとさへ述べている。
- (35) 彭瑞金「悲苦大地泉甘土香——李喬の蕃仔林故事」『台湾文芸』(第十四卷第五十七期、一九七八年) 一〇一～一〇二頁。
- (36) 花村「山村」与「蕃仔林的故事」的比較』『中華文芸』(第十一卷第四期、一九七六年) 九十四～九十五頁。

- (37) 李喬、前掲『李喬短篇小說全集五』、九十五頁。
- (38) 李喬、前掲『李喬短篇小說全集五』、一九六頁。
- (39) 台湾総督官房情報課編『大東亜戦争と台湾』（台湾総督府、一九四三年）二二三頁。
- (40) 農産物市場研究会編『自由化にゆらく米と食管制度』（筑波書房、一九九〇年）六十一頁。
- (41) 黄登忠・朝元照雄『台湾農業経済論』（税務経理協会、二〇〇六年）十三、十五頁。
- (42) 同上書、十六頁。
- (43) 黄昭堂、前掲書、一八四頁。
- (44) 竹中信子、前掲書、一七三、一七四頁。
- (45) 李喬『哭声』『青溪月刊』（第三十六期、一九六九年）。なお、本稿における作品の引用箇所は李喬、前掲『李喬短篇小說全集五』を底本とし、拙訳によるものである。
- (46) 『哭声』賞析、呉晟編『大家文学選・小説卷』（台中市・明光出版社、一九八一年）三三四頁。
- (47) 同解説文は「李喬『哭声』賞析」と改題し、洪醒夫『洪醒夫全集・評論卷』（彰化市・彰化県文化局、二〇〇一年）に収録されている。
- (48) 『生命的追求与関懐——李喬作品討論会記録一』（台湾文芸）（第十四卷第五十七期、一九七八年）四十六頁。
- (49) 台湾総督府編、前掲書、七十二、七十三頁。
- (50) 莊園、前掲論文、七十四頁。
- (51) 近藤正己『総力戦と台湾』（刀水書房、一九九六年）十九頁。
- (52) 同上書、二十九頁。
- (53) 同上書、三五一頁。
- (54) 台湾総督官房情報課編、前掲書、三十頁。
- (55) 近藤正己、前掲書、三五一頁。
- (56) 同じ頃、一九三八年二月には陸軍特別志願兵令が閣議決定され、植民地下の朝鮮では植民地の民に兵役を課すことが可能となっていたが、一方で台湾には適用されなかった。その理由について、近藤正己は「台湾に適用しなかったのは中国戦線では台湾のマジョリティである漢民族に銃をもたせることの危険を感じたことが主因であろう」（近藤正己、前掲書、四十四頁）と述べている。

- (57) 近藤正己、前掲書、三五二頁、および秦郁彦編『日本陸海軍総合事典・第二版』（東京大学出版会、二〇〇五年）七二五頁。
- (58) 近藤正己、前掲書、三五二～三五三頁。
- (59) 近藤正己、前掲書、三九九頁。
- (60) 近藤正己、前掲書、三八四頁、および近藤正己、前掲論文、一七九頁。
- (61) 台湾総督府編、前掲書、七十五頁。なお、志願兵制度に関しては次のとおりである。一九四一年六月には台湾での陸軍特別志願兵制度の開始が閣議決定され、翌年四月より施行された。また、一九四三年八月には海軍でも特別志願兵制度が閣議決定され、施行された（台湾総督府編、前掲書、七十一～七十二頁）。戦場での兵力不足を補うために陸・海軍とともに実施した特別志願兵制度では、毎年それぞれ約一千人の定員枠に志願者が殺到し、「血書志願」という社会現象も巻き起こしながらその数を増やしていった。陸軍特別志願兵では、一年目の一九四二年には約四十二万五千人が志願し、翌年には約六十万一千人、三年目には約七十五万九千人と志願者数は増加し続けた。その志願条件であった十七歳以上の年齢にあたる台湾人男性の人口統計は、一九四〇年一月現在で六十三万三三二五人（十七歳から三十歳未満）であったために、当時の台湾人青年のほぼ全員が志願したことになるという（近藤正己、前掲書、三七一～三七二頁）。なお、特別志願兵制度への志願者は台湾だけではなく、日本軍政下や汪精衛政権統治下にあった香港や広東、汕頭、厦門方面からも在留台湾人が一千人以上志願していた（菊池一隆『日本軍ゲリラ台湾高砂義勇隊』平凡社、二〇一八年、六十七頁）。
- (62) 黄昭堂、前掲書、二六五頁。ただし、黄が示す陸軍・海軍軍夫の人数は軍属もあわせて人数となっている。
- (63) 黄昭堂、前掲書、二六五～二六六頁。このように戦後の国民党統治下においても不条理な生き方を迫られたのは、元少年工たちも同様であった（『台湾少年工口述訪談記録』『宜蘭文獻雜誌』第一〇九期、二〇一八年）を参照した）。
- (64) 李喬『台湾文化造型』（台北市・前衛、一九九二年）三十頁。
- (65) 李喬『續紛二十年』『自由日報』（一九八一年十月三、四日）。なお、『孤灯』は脱稿の年に出版されたが、作品自体は一九七八年四月より『民衆日報』に連載されていた。本稿における作品の引用箇所は李喬『孤灯』（台北市・遠景、一九七九年）を底本とし、拙訳によるものである。ただし、翻訳にあたっては李喬『岡崎郁子・三木直大訳』『寒夜』（国書刊行会、二〇〇五年）の該当箇所を参考にした。
- (66) 秦孝儀編『光復台湾之籌画与受降接收』（台北市・中国国民党中央委员会党史委员会、一九九〇年）二二二頁。
- (67) 卞鳳奎「戦前・戦中におけるフィリピンと台湾人」、大谷渡編『六十五年目の証言——日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場』（関西大学文学部大谷研究室、二〇一〇年）四十頁。

- (68) 齊邦媛『千年之淚』（台北市・爾雅、一九九〇年）一九〇頁。
- (69) 「李喬」『寒夜三部曲』討論会』『文学界』（第四集、一九八二年）十一頁。
- (70) 廖偉竣、前掲論文、五十二頁。
- (71) 李喬、前掲『孤灯』、九十六〜九十七頁。
- (72) 竹中信子、前掲書、一九七頁。
- (73) 先述のとおり、一九四二年四月には最初の特別志願兵制度が施行されたが、折しも同月には台湾軍の要請により台湾人婦女を対象とする篤志看護助手の募集も始まっていた。この時の募集は台湾での海外派遣看護助手に関する募集事業としては初めての試みであり、終戦まで計三回の派遣が実施された。その実態は、台湾全島の年齢十六歳以上二十五歳未満で未婚の女性から選抜し、香港・広東方面を中心に派遣するものであった。応募倍率は各回平均して二十倍を超え、数千人の志願者から二百人が選抜され派遣されたが、彼女たちはいずれも裕福な家庭に育ち高等女学校で教育を受けた子女たちであった（台湾総督官房情報課編、前掲書、五十二〜五十三頁、および大谷渡「帝国の落日を背負って——野戦病院と遺芳録から」、大谷渡編『青春と戦争の惨禍——大阪日赤と救護看護婦』関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一二年、十頁）。こうした看護助手は男性を対象とした志願兵制度とともに募集がかけられることが多く、当時は台湾社会で婦人雑誌や少女雑誌を通して内地の従軍看護婦への注目度も高まっていたことから、看護助手という補佐的な職種に対しても相当な人気が集まったことが志願熱の高さの背景にあったとも考えられている（星名宏修「植民地を読む——「賈」日本人たちの肖像」法政大学出版局、二〇一六年、二二一〜二二二頁）。
- (74) 柳本通彦「消えぬジャンゲルの記憶——台湾人従軍看護婦」『保健師ジャーナル』（第六十巻第六号、二〇〇四）五八五頁。
- (75) 大谷渡「問い続けたいあの戦争と平和について——日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場」大谷渡編、前掲『六十五年目の証言』、および周婉窈編『台籍日本兵座談会記録並相關資料』（台北市・中央研究院台湾史研究所籌備処、一九九七年）を参照した。
- (76) 三木直大「解説」、李喬、前掲『寒夜』、四〇四頁。
- (77) 李喬、前掲『續紛二十年』。なお、本稿における作品の引用箇所は李喬、前掲『李喬短篇小説全集十』（苗栗市・苗栗県立文化中心、二〇〇〇年）を底本とし、拙訳によるものである。
- (78) 李喬、前掲『思想、想法、留言』、一四〇頁。
- (79) 明田川聡士「李喬文学と『台湾意識』の形成——フォークナナー、安部公房の受容と『歴史素材小説』創作をめぐって」（東京歴史と文学のはざままで

- マテシス・ウニヴェルサリス 第二十一卷 第二号
- 大学博士論文、二〇一七年）七十一頁。
- (80) 楊照「霧与画——戦後台湾文学史散論」(台北市・麦田、二〇一〇年) 一五二頁。
- (81) 謝里法「従大戦後日本『戦争文学』看李喬的『孤灯』」『台湾文芸』(第八十八期、一九八四年) 二一四頁。
- (82) 佐々木毅ほか編『戦後史大事典・増補新版』(三省堂、二〇〇五年) 五三〇頁。なお、参照した該当箇所は川村湊の執筆による「戦後文学」の項目である。
- (83) 黒古一夫「戦争は文学にどう描かれてきたか」(八朔社、二〇〇五年) 一〇八頁。
- (84) 栗原幸夫「あどがき」、日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』(毎日新聞社、一九七八年) 二六五頁。
- (85) 中川成美「戦争を読む」(岩波書店、二〇一七年) 十二頁。
- (86) 大岡昇平「徐雲濤訳」『野火』(台南市・経緯書局、一九五九年)。なお、一九六五年には同じ訳者によって「凄惨をきわめたフィリピン白兵戦の記録」二百万冊を超えるベストセラー」と表紙に印字された大岡昇平「第二次世界大戦秘聞」(台南市・経緯書局)も翻訳出版されている。未見ではあるが、同書原作は大岡の『俘虜記』(一九四八)である可能性が高い。
- (87) 五味川純平「蔡謀渠・劉遠崎・温亜蘭訳」『人間の条件』(高雄市・公益、一九五九年)。
- (88) 林果顕「戦後台湾の戦時体制(一九四七〜一九九二)」『台湾風物』(第五十八巻第三期、二〇〇八年)を参照した。
- (89) 菅野敦志「台湾の国家と文化」(勁草書房、二〇一一年) 一八九頁。
- (90) 高幸玉「日本小説在台湾的翻訳史——一九四九至二〇二二」(台北県・輔仁大学翻訳学研究所修士論文、二〇〇四年) 十二〜十三頁。
- (91) 鍾肇政「鍾肇政全集二十五」(桃園市・桃園県文化局、二〇〇二年) 六十頁。
- (92) 同上書、六十三頁。
- (93) 同上書、四〇五頁。
- (94) 本稿で引用した李喬の鍾肇政宛て書簡には、たびたび中村光夫『日本の現代小説』(一九六八)に関する言及も見られる。たとえば、一九七〇年五月七日付けの書簡では「鄭、筆者注」清文兄のところから借りてきた「中村光夫」の『日本の現代小説』、「平野謙」ら五人の全集は、六〇パーセント分かります(鍾肇政、前掲書、二三七頁)と記しており、当時李喬は同書を熱心に読んでいたようだ。中村光夫(一九一一〜八八)は戦後の日本文学界を代表する文芸評論家であり、一九四九年には吉田健一や福田恆存らとともに作家や文学者による親睦会「鉢の木会」を結成していた。そこでは後に大岡昇平をはじめ、三島由紀夫、吉川逸治、神西清なども参加している。また、『日本の現代小説』とは中村の代表的著作の一つであり、同書のな

かでは大岡の諸作品についても好意的に論じていた。李喬はこうした中村の著書を通して、大岡作品に対して関心を深めるきっかけをつかんでいたと推測される。

(95) 謝里法、前掲論文、二十四頁。

(96) 鍾肇政、前掲書、四九〇頁。

(97) 李喬・紀俊龍「戯諷的笑顔・沈重的生命——観点、後設的重構」、印刻文学生活誌編『想像的壯遊』（台南市・国立台湾文学館、二〇〇七年）二二一～二二二頁。

本研究は科研費・研究活動スタート支援「19K23080 戦後台湾文学における『戦争記憶』に関する基礎的研究」の助成を受けたものです。

